



はじめに

中原4号墳の玄室からは豊富な須恵器が出土しています。須恵器は、専用の窯を用いて1,000°C以上の高温で焼き上げた灰色の土器です。5世紀初頭頃に製作技術が朝鮮半島から日本列島へ伝わりました。須恵器は、数多くの古墳から出土し、時期差の検討に用いられています。古墳から出土した須恵器は、古墳を造った時期や埋葬の時期と回数を推定することができる資料のひとつです。中原4号墳から出土した須恵器の特徴について紹介し、中原4号墳の築造時期や埋葬の時期と回数について触れます。また、中原4号墳とその周辺の古墳から出土した須恵器の特徴や器種構成と比較し、須恵器から見た中原4号墳の被葬者について考えます。

1. 出土須恵器の特徴

中原4号墳から出土した須恵器は、6世紀後葉を中心とした時期に生産されたと捉えられるものが主体的です。器種とその出土量は、合計で7器種29個体がみられます。なかでも把手付碗の所有と器種や特徴の多様性が注目できます。

2. 中原4号墳の造営時期と諸行為の時期

中原4号墳に副葬された須恵器は、5世紀前半に生産された可能性があるもの（I期）、6世紀中頃（II期）、6世紀後葉（III期）、6世紀末から7世紀初頭（IV期）の4つの時期に分けることができます。

これらの須恵器の時期と出土状況の相関性をみると、玄室の床面に接した状態で出土するものはI～III期のものに限られ、中原4号墳の築造と初葬は6世紀後葉を中心とした時期に行われたと捉えられます。また、IV期に生産されたと捉えられるものは玄室の床面からやや浮いた状態で出土しており、追葬に伴うものと考えられます。III期に生産されたものの中にも床面から浮いた位置で出土したものもあり、追葬に伴い移動された、もしくは、搬入された可能性がうかがえます。須恵器の形態差や出土状況からは、初葬後、追葬などの行為が2回以上行わ



図1 中原4号墳出土土器

れたと想定できます。初葬時に用いられたと捉えられる須恵器には口縁部や底部に磨耗や欠損がみられ、古墳に副葬される前に使用されていたことがうかがえます。葬送儀礼に際し、新たに調達されたものではなく、使用された器物が副葬品として納められたと言えます。

3. 須恵器の多様性

同時期のものと捉えられる同一器種の形態差や粘土の違い、焼き具合から最低3箇所の生産地から搬入されたと想定できます。壺類やハソウ・壺・提瓶・横瓶で複数個体の副葬が認められますが、いずれの器種においても同じ形態のものではなく、産地や窯の操業段階の違いが想定できます。

中原4号墳と同時期に造られた周辺の古墳では、多様な器種を持つ古墳はあるものの、中原4号墳のように貯蔵具の同一器種を多く所有する事例はみられません。また、周辺の古墳から出土した須恵器には、色調や形態に統一感が認められます。中原4号墳出土の須恵器は、他の古墳に比べて複数の産地からもたらされていることが認識できます。



図2 中原4号墳出土須恵器の時期

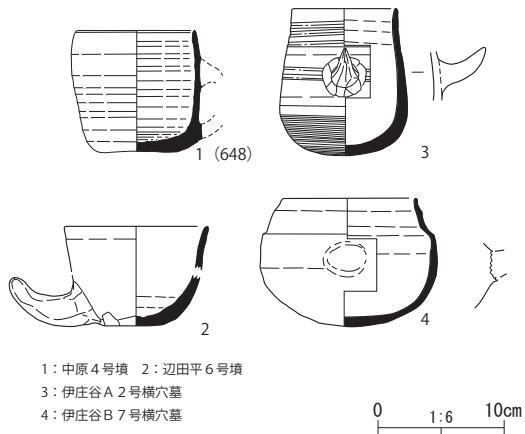


図3 中原4号墳出土把手付碗と6世紀代の把手付碗

4. 把手付碗について

把手付碗は、一般的に5世紀前半を中心とした時期に生産された器種です。中原4号墳から出土した把手付碗は、円柱状の形態で、側面には現在は欠損していますが、環状の把手がひとつ付いていたと考えられます。口縁部の先端部分は丸く整形されています。一緒に出土した須恵器とは、原料とした粘土の質や調整の方法などに大きな違いが認められます。しかし、形態が単純で、焼成具

合は一緒に出土した須恵器に類似したものがあり、6世紀代に生産された可能性も否定できません。

なお、5世紀前半に生産された場合には、生産から副葬までに100年以上の伝世期間を経て、副葬されたと考えられますが、県内の事例において100年にわたり伝世した事例は知られていません。いっぽう、県内において6世紀に生産された把手付碗の事例は3例確認できますが、いずれも角状の把手をもち、焼成具合は、在地で生産されたと判別できるものです。

5. 中原4号墳の被葬者像

中原4号墳の被葬者は複数時期・複数产地の須恵器を入手・保有できる立場にあったと考えられます。中原4号墳の築造時期は、駿河地域において須恵器生産が開始された時期にあたります。初葬の時期よりも100年以上古い（古く見える）把手付碗の所有や副葬された多様な須恵器の所有からは、中原4号墳の被葬者が須恵器生産の導入や管理に指導力を発揮した人物（集団）であったことを示していると考えられます。